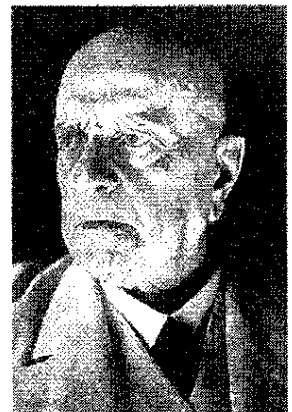
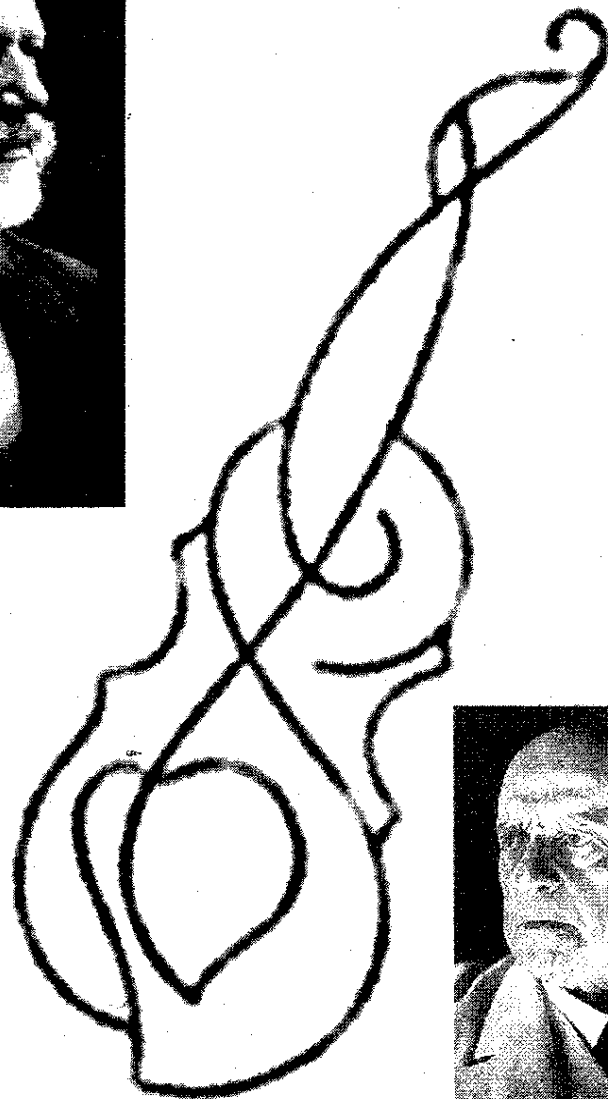
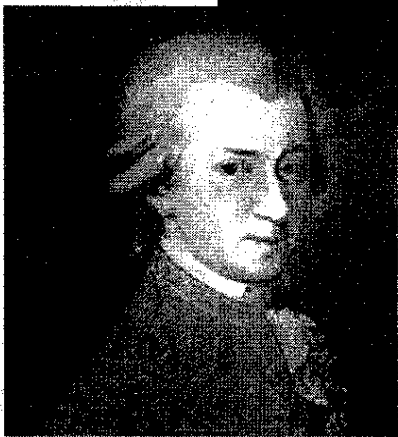
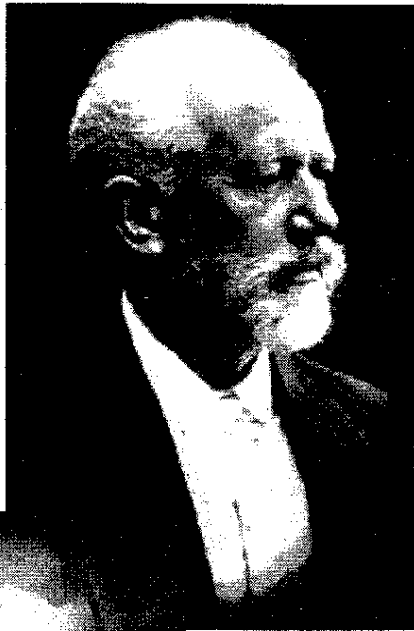


Ensemble Buono!

3rd Concert



2010. 6/28(mon) Open 18:30 Start 19:00
Tokyo College of Music 7-Bild. Studio

Ensemble Buono!

目白大学人間福祉学科准教授原田和幸の主催する音楽レクリエーション研究会の音楽ボランティア活動への参加メンバーを中心に、より音楽性の高い演奏を追及しようと結成された弦楽アンサンブル。若手の演奏家、音大生、アマチュアの愛好家で構成される。津田泰孝氏を常任指揮者・音楽監督として起用し、2009年の春の荻窪音楽祭（かん芸館）でデビュー（モーツァルト ディベルティメント K.136、ヴィヴァルディ「四季」より「春」）。

第二回の演奏会はレスピーギのリュートのための古風な舞曲 第3組曲などを取り上げ好評を得た（2009年10月24日 於：目白大学 佐藤重遠記念講堂）。第三回はN響の白井 篤氏をコンサートマスターに迎え、更なる音楽性の向上を追及する。

指揮：津田泰孝

池野成氏に管弦楽法とオーケストラ音楽の作曲、北村昭氏に和声法・フーガ・室内楽の作曲を師事。東京音大作曲科卒業後、広上淳一、湯浅勇治、小松一彦、R・Schumacherの各氏に指揮を師事。仙台フィル、群響、セントラル愛知響等を指揮。創作オペラのオーケストレーション等も手掛ける。傳田文夫氏に演奏学と聴覚訓練を学ぶ。東京音大指揮科助手。Sオーケストラ、1年弦楽合奏等を指揮・指導している。



コンサートマスター：白井 篤

桐朋学園大学卒業。99年、NHK交響楽団に入団。2003年、アフィニス文化財団海外研修員としてオーストリア/ウィーンへ留学。留学中もウィーンでリサイタルやコンチェルトのソロなどの演奏活動を積極的に行う。また、モスクワの現代音楽祭にてオーストリアの現代作品を演奏、好評を博す。ヴァイオリンを守岡輝、日高毅、篠崎功子、Alexander Arenkowの各氏に師事。現在、クアルテット リゾナンツァ 1st Violin、ストリングアンサンブル「Vega」、室内オーケストラ「ARCUS」メンバー、国立音楽大学付属中学・高校非常勤講師、NHK交響楽団 2nd ヴァイオリン・フォアシュピーラー。



曲目解説

Sibelius, J. Andante Festivo シベリウス アンダンテ・フェスティボ

1922年にサイナトゥサロ製作所の創立25周年記念の祝賀曲として作曲を委嘱され、その祝賀会場で初演された。このときは弦楽四重奏曲であった。シベリウスはこの曲をたいへん気に入っていたらしく、1930年に弦楽合奏曲に改訂しており、今日ではほとんどこの弦楽合奏版で演奏される。この版では、ティンパニは使用任意と指定されており、曲の最後4小節にバス・パートの音をなぞるように登場する。祝祭的という言葉の一般的なイメージとは異なり、この曲は幾分儀式ばったところもある、荘重で一種宗教的な讃歌となっている。ト長調で始まるが、ホ短調や教会旋法が交錯したり、イ長調に移行したりしながら、冒頭の動機が形を変えて演奏される。そしてト長調のアーメン終止で荘重に曲が締めくくられる。交響曲第6番（1923年）、第7番（1924年）とほぼ同時期に書かれた、シベリウスの創作期最後に属する傑作である。

Mozart, A. W. Divertimento F-dur K.138 モーツァルト ディベルティメント ヘ長調 K.138

ディベルティメント（イタリア語）は、嬉遊曲と邦訳される様に、自由な形式による娯楽的な実用音楽である。18世紀後半に王侯貴族達の食事や祝いの場などで演奏される音楽であった。このディベルティメント（K.136~138）は二度目のイタリア旅行からザルツブルクに戻り一気に書き上げられた。当時イタリアは音楽の先進国としてドイツ語圏の諸国に水をあけていた。16歳のモーツァルトはこの旅行で音楽観や表現力が明らかに豊かさを増している。そうした成果が如実に結実した傑作として注目に値するだろう。本日奏されるK.138は、有名なK.136同様、急一緩一急の3楽章にまとめられている。イタリア風序曲（シンフォニア）の様式を盛り込んだ、愛らしく美しい作品である。

Tchaikovsky, P. I. Serenade for Strings C-dur Op.48 チャイコフスキー 弦楽セレナード ヘ長調 作品48

チャイコフスキーが1880年に作曲した弦楽オーケストラのための作品。チャイコフスキーの代表作の一つとして広く親しまれている。モーツァルトへの敬愛から書いたものであり、書簡にも「強い内的衝動によって書かれ、芸術的な価値を失わない」と記した、屈指の名曲である。

第1楽章 Pezzo in Forma di sonatina: Andante non troppo - Allegro Moderato

「ソナチネ形式の小品」と題されている通り、展開部を欠くソナタ形式である。ヘ長調でありながら、イ短調の主和音で開始される重厚な序奏は、きわめてメランコリックで印象深い。序奏の雰囲気を保ち、広々とした第一主題と、細かい音符による、軽やかな第二主題からなる。提示部が終わると、リピートするように見せかけて、再現部を始めるというユニークな書法をとっている。コーダで序奏主題が再現される。

第2楽章 Waltz: Moderato (Tempo di valse)

ワルツ。ソナタや交響曲の楽章にワルツを用いることは、チャイコフスキーの常套手段であったが、この楽章も例外でない。ワルツのリズムに乗って、第1ヴァイオリンが奏するメロディーは親しみやすく、有名である。

第3楽章 Elegie: Larghetto elegiaco

「哀歌」と題されている。ホモフォニックで印象的な序奏に始まり、3連符のリズムに乗って、様々な声部で淡々とした歌が奏される。倍音を響かせた終止の和音から、直接第4楽章に繋がる。

第4楽章 Finale (Tema russo): Andante - Allegro con spirito

第3楽章から続いた和音によって開始され、そこから穏やかであるが、感動的で何かが起こりそうな序奏となる。主部のモチーフが示され、主部に流れ込む。なお、「ロシアの主題によるフィナーレ」とあるように、両主題はロシア民謡を基盤としている。終結部に第1楽章の序奏主題が再現され、堂々と全曲を閉じる。

Ensemble Buono! アンサンブル・ブーノ!

音楽監督・常任指揮者: 津田泰孝(東京音楽大学 指揮科助手)

客演コンサートマスター: 白井 篤(NHK 交響楽団 第2ヴァイオリン フォアシユピラー)

1st Violin

白井 篤

齋藤羽奈子 (東京藝術大学1年)

知見寺 武 (東京音楽大学4年)

迫田 圭 (東京音楽大学3年)

井川知海 (東京音楽大学附属高校3年)

草野まみ (洗足学園音大オーケストラ研究生)

2nd Violin

須賀麻里江 (東京藝術大学卒)

高須昌緒 (東京音楽大学 院卒)

大橋ひさ (桐朋学園大研究生)

長谷川智恵 (東京音楽大学 4年)

亀井友莉 (東京音楽大学附属高校 3年)

西原史織 (東京音楽大学附属高校 3年)

三谷峰生 (武蔵野音楽大学卒)

Viola

山口 真 (東京藝術大学卒)

宗像真実子 (武蔵野音大パルナソスエミネンス科修了)

横島俊介 (東京音楽大学 3年)

伊東杏子 (東京音楽大学 3年)

Cello

堀江牧生 (東京音楽大学 2年)

成田七海 (東京藝術大学 1年)

神谷 勝 (東京大学医学部 3年)

土師晋太郎 (東京音楽大学附属高校 3年)

Contrabass

永田由貴 (東京藝術大学 院2年)

木幡奈緒美 (東京藝術大学 3年)

柿沼隼 (東京音楽大学 2年)

Timpani

横内 諒 (東京音楽大学 3年)

ステージマネージャー: 大市泰範 (東京音楽大学 1年)

代表: 原田和幸 (目白大学准教授) universalon@gmail.com

